筆者の議論は「老い」のマイナスイメージから出発している。例えば、「遠くに死が見えている」「肉体的な衰え」「晩年の惨めさ」と語り、老いを直視して今の自分を知るべきだと訴える。しかし、「老い」にはプラスの側面もあるのではないか。

私は以前、鹿児島県屋久島の縄文杉を見学したことがある。あまりの巨大さに圧倒されながらも、どこか懐かしさを感じた。古老に出会ったような感覚だった。思わず手のひらを当てると、人間の歴史について書かれた分厚い辞書に触れたような気持ちになった。

同じように、人は歳を重ねるうちに、経験や歴史を自分の中に蓄積していく。歴史は「過去の現在の間の対話」であると言われるが、過去と現在を知る老人は私たちの対話相手であり、私たちに歴史を伝える証言者であると言える。その意味で、「老い」には歴史を伝えるという積極的な役割があると私は考える。

また、一般的に言えば、若者より老人のほうが「死」に近い存在である。誰だって親しい人が亡くなると、立ち直れないくらいの喪失感に打ちのめされる。しかし、しばらくして気づくのは、その人（老人であっても）は私たちの記憶の中に生きていて、私たちを励まし続けてくれていることだ。私は「老い」や「死」が今を生きる私たちに「生」の意味を自覚させてくれている。

日本では少子高齢化が進み、老年人口の割合の上昇が大問題のように論じられている。しかし、老人も社会の多様性を構成する一員として、多くの積極的な役割を担っている。「老い」のプラスの側面から議論を始める時、「老い」の社会的な役割や意味は今とは異なってくる。私は、社会の中で「老い」の知恵をもっと活かしていくべきだ、と考える。
説得